

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	古典詩詞に見られる「春花秋月」：魚玄機の「題隠霧亭」を中心として
Author(s)	王, 若冲
Citation	中國中世文學研究 , 76 : 31 - 45
Issue Date	2023-03-28
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054526">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054526</a>
Right	
Relation	



# 古典詩詞に見られる「春花秋月」 —魚玄機の「題隱霧亭」を中心として—

王 若 冲

## はじめに

中国古典詩において、「春花」「秋月」はいずれもありふれた題材となっている。これらは魏晉南北朝においてすでに古典詩に現れており、唐代でも引き続き詩語として用いられている。それを受けて、晩唐の魚玄機は、「題隱霧亭」(二七七)『1』で、次のように詠じた。

①晩唐・魚玄機「題隱霧亭—隱霧亭に題す」(二七七)

春花秋月入詩篇 春花 秋月 詩篇に入り  
白日清宵是散仙 白日 清宵 是れ散仙  
空捲珠簾不曾下 空しく珠簾を捲いて 曾て下さず  
長移一榻對山眠 長に一榻を移して 山に對して眠る

このように魚玄機は初めて「春花秋月」を一つの詩語として用いたのである。そして、宋代に至って、「春花秋月」は、多くの古典詩に用いられるようになった。

れた李煜の名句と魚玄機の句とを比較することにより、魚玄機詩の特色の一端について論じてみたい。

まず、『先秦漢魏晉南北朝詩』並びに『全唐詩』に収録される詩における「春花」「秋月」の用例を具にみていくことから始める。

## 一 古典詩における「春花」

春花は古典詩によく見られる詩語であるが、本節では時代順に代表的なものを挙げてみる。

(1) 魏晉南北朝

②南朝宋・鮑照「中興歌十首」其七(二二七二)

九月秋水清 九月 秋水 清く  
三月春花滋 三月 春花 滋し

例②では、「秋水」と「春花」が対になっている。この詩の「春花」は、前句の「秋水」と対になり、自然の景物を表す語として用いられている。

③南朝梁・蕭統「有所思」(二七九一)

別前秋葉落 別るる前 秋葉 落ち  
別後春花芳 別るる後 春花 芳る

④南朝梁・庾成師「遠期篇」(二二三六)

憶別春花飛 別れを憶へば 春花 飛び  
已見秋葉稀 已に見る 秋葉の稀なるを

⑤南朝陳・張正見「賦得威鳳棲梧詩」(二四九六)

欲舞春花落 舞はんと欲すれば 春花落ち  
將飛秋葉空 將に飛ばんとすれば 秋葉空し

魚玄機の用いた「春花秋月」という詩語には、自然の景物である春の花と秋の月そのものという意味と、素晴らしい事物と時間の象徴という意味との、二つの意味が含まれており、この捉え方は現代まで続いている。ところが、現在、『漢語大詞典』(漢語大詞典出版社、一九八六)のような相当權威があるとされる辞書などにおいても、後述の李煜の句しか載せられておらず、李煜より前の魚玄機がすでに「春花秋月」の詩語を用いていることが明記されていない。また、魚玄機の「題隱霧亭」(二七七)に関する先行研究においては、女性詩人の述懐詩<sup>2)</sup>や詠物詩<sup>3)</sup>という視点からの検討はあるが、詩語の面からの考察は見当たらない。

そのため、本稿では、魚玄機が初めて「春花秋月」を一つの詩語として用いたことを改めて確認した上で、古典詩に見られる「春花」「秋月」の捉え方の変遷について考察し、それを踏まえて「春花秋月」という四字の詩語の用いられ方を検討する。そして、「春花秋月」が用いら

例②と同じく、例③例④例⑤には春と秋の対句が用いられている。例③「有所思」には、「別前」と「別後」という二つのキーワードがあり、「秋葉」と「春花」は自然の移り変わりを描くことによって、物事の変化を象徴している。これは古典詩歌にあげる「春秋」の代表的な象徴で、時間の流れと抒情を表現している。<sup>4)</sup>

また、例④「遠期篇」では、「別れの時を思い出している」と、春の花が舞って、今はもう秋の葉が散る時になった。」と表現している。これも、例③の時間の変化と同じであろう。

例⑤「賦得威鳳棲梧詩」にも「春花」と「秋葉」の対句が見えるが、この例では時間の流れを表現しているというより、自然の景物の象徴として用いられているといえよう。

例⑤と同様に、自然の景物を象徴する場合には、「春花」と「春月」が同時に用いられる例がある。

⑥南朝陳・陳叔寶「獨酌諠四首」其二(二五一一)

春花春月正徘徊 春花 春月 正に徘徊し  
一尊一弦當夜開 一尊 一弦 夜に當って開く

例⑥のこの二句において、詩人が描いたのは、夜の独酌の場面である。「春花」「春月」を前にして、酒を飲み、管絃の音楽を聴き、独酌の時間を楽しんでいく。

以上のように、魏晉南北朝には、「春花」がすでに古典詩に多く用いられていることがわかる。次に、唐詩に出てくる「春花」が、どのような意味で、どのような言葉

と組み合わせて使われているかを見てみる。

(2) 唐代

⑦初唐・劉希夷「春女行」(全八二)

尚言春花落 尚ほ言ふ 春花 落つと

不知秋風起 知らず 秋風の起るを

例⑦「春女行」は、「春の花が落ちること」と「秋の風が吹くこと」を用いて、時間の流れを表現している。この表現は、前節で見た「春花」と「秋葉」を組み合わせた使い方に近いもので、春と秋で景色が変わることから、時間の移り変わりや流れを表現するものである。

その他、「春花」という詩語を用いて、春の花そのものを表す表現は多いが、それを借りて心情を表す表現も常見する。

⑧盛唐・杜甫「十二月一日三首」其二(全二一九)

春花不愁不爛漫 春花 愁へず 爛漫たらざるを

楚客唯聽棹相將 楚客 唯だ聽く 棹の相ひ將あるを

例えば、例⑧は、「(毎年咲くので、)春の花は咲き誇らないことを悲しまないが、楚の地にいる異邦人の私は、合わせて漕ぐ櫂の音しか聞こえていない。」と詠う。これは冬の日に書かれた詩で、春の気配で動く具体的な情景が描かれている。「春花」とは、春に応じて咲く花のことである。

⑨中唐・白居易「題贈定光上人」(全四三二)

春花與秋氣 春花と 秋氣と

不感無情人 無情の人を感ぜしめず。

秋月」の形が多い。

⑪晉・孫綽「秋日詩」(九〇一)

蕭瑟仲秋月 蕭瑟たり 仲秋の月

颺風雲高 颺辰として 風雲高し

⑫晉・陶潛「辛丑歲七月赴假還江陵夜行塗中」(九八)

叩枻新秋月 枻を新秋の月に叩き

臨流別友生 流れに臨みて 友生に別る

⑬南朝宋・謝靈運「鄰裏相送至方山詩」(二一五九)

析析就衰林 析析として 衰林に就き

皎皎明秋月 皎皎として 秋月 明らかかなり

例⑪の「仲秋月」の場合、仲秋は秋の第二の月で、すなわち旧暦の八月である。この月は月そのものを意味するのではなく、仲秋という一ヶ月を意味するものである。次に、例⑫の「新秋月」は、「初秋の月のもとに櫂を漕ぎ、川を前にして友人と別れる。」という句中で、天体の月を表現する「初秋の月」である。例⑬の「皎皎として秋月 明らかかなり」の句は、時を指すのではなく、「秋

月が明るい」という天体の月の形容である。そのほかにも、戦争の描写など、詩の中における特定の場面に「秋月」が登場する。

⑭南朝梁・蕭衍「邊戍詩」(二五三六)

秋月出中天 秋月 中天に出で

遠近無偏異 遠近 偏異無し

戦争と関わる「秋月」は、この句に最初に見えるが、

⑩晚唐・溫庭筠「獵騎辭」(全五七七)

晚柳未如絲 晚柳 未だ 絲の如からず

春花已如霰 春花 已に 霰の如し

例⑩には、「春花」と「秋氣」の組み合わせが見える。「春の美しい花や秋の寂しい雰囲気は、感情のない人の気持ち動さない。」と、「春花」と「秋氣」で人の感情と繋がっていることを描写している。例⑩の温庭筠の句は例⑨と同じく、「春花」は自然の景物の一種類として登場するが、「春花はすでにあられのようにちらちらと散っている。」と、美しい自然の景物がなくなつた寂しさを詠っている。

以上のように、唐代に至っても、魏晉南北朝と同じく、「春花」の用例は多く、さらに「秋氣」や「秋風」と対になる例が見られるようになる。引き続き時間の変化を表現する例もあり、心情を表現する例も見られるようになるが、「春花」と「秋月」はまだ同じ句に現れていない。

## 二 古典詩における「秋月」

第一節では、古典詩に登場する「春花」や対句となる詩語について考察した。この節では、「秋月」にまつわる代表的な詩を分析し、「秋月」の意味や表現方法を探ってみてみたい。

(1) 魏晉南北朝

「春花」の表現とほぼ同じく、魏晉南北朝において、「秋月」もすでに古典詩に見られる。早い時期の例は「○

この用法は長い時期を隔てて、中唐にまた引き続き用いられる。この点については、次節でも触れる。

春と秋は、古典や詩によく見られる対句表現に用いられる詩語であるため、「秋月」に対して春を指す事物を用いる例もある。

⑮南朝梁・何遜「与蘇九德別詩」(二六八九)

春草似青袍 春草 青袍に似て

秋月如團扇 秋月 團扇の如し

月は送別詩にもよく登場している。例⑮の送別詩の中で、何遜は、まず青草を青袍すなわち友人との情誼にたとえ、それから秋月を團扇すなわち集まることにたとえ、これらを利用して友人との感情と離別の悲しさを表す。この場合、秋月は団欒を意味するといえよう。

⑯南朝陳・陸瓊「還臺樂」(二五二八)

春風秋月恒好 春風秋月 恒に 好く

驩醉日月言新 驩醉して 日月に新たなり

この例⑯で、四字の並びの「春風秋月」が初めて現れ、季節の好ましい風物の象徴として用いられている。

(2) 唐代

唐代に至って、古典詩における「秋月」の用例はより多くなる。

⑰盛唐・岑參「梁園歌送河南王説判官」(全一九九)

大梁一旦人代改 大梁 一旦 人代改まり

秋月春風不相待 秋月春風 相ひ待たず

⑱中唐・李益「夜上西城聽梁州曲二首」(其一)(全二

此時秋月滿關山 此の時とき秋月 關山に滿つ  
何處關山無此曲 何れの處か 關山 此の曲無か  
らん

⑮中唐・武元衡「塞外月夜寄荆南熊侍禦」…(全三二七)

雲雨一乖千萬里 雲雨 一たび乖けば 千萬里  
長城秋月洞庭爰 長城の秋月 洞庭の爰

⑯の例については後述することにして、⑮⑯の例について先に触れる。

前述したように、戦争と関わる「秋月」は先に、例⑭蕭衍の「邊戍詩」に見えたが、その後、中唐以前には見当たらない。中唐になると、戦争と関わる「秋月」の例が増えていく。例えば、例⑮は辺塞を舞台とした詩で、「秋月」と繋がる「關山」も辺塞詩によく見られる詩語である。例⑯も、「塞外月」というタイトルからもわかるように、辺塞の描写であり、「長城」も辺塞詩によく見られるイメージである。

しかし、辺塞詩に「秋月」が用いられる場合、「春〇」という詩語が同時に用いられることはない。辺塞詩のイメージは、悲しいものや雄渾なものが多く、寂しさの表現に偏っているのに対して、「春〇」「秋月」が同時に現れると、より美しく軽やかなものになるためと推測される。

次に、例⑰に見えた「秋月春風」という詩語について考察する。

という句も、春風と秋月を自然の景物そのものとして用いるだけではなく、時間の変遷と交替を詠うものである。このような表現は、後に述べる李煜の詞に見られる「春花秋月」の用法と類似していると思われる。

この「春風秋月」という表現は、その後の明代にも用いられる。例えば、明・于謙の「静夜思」に見られる「春風秋月不相待、倏忽朱顏變白頭。」(春風秋月 相ひ待たず、倏忽 朱顏 白頭に変はる。)(『石倉歴代詩選』卷二六八)は、「時は人を待たず、あつというまに、青年は白髪頭の老人になった。」という意味である。時間の変化という面では同様の例と言えらる。

以上のように、この節では、古典詩における「秋月」の表現の仕方を整理し、「春風秋月」という詩語にも注目した。「春風秋月」は、時間の変化を表すことがあることがわかったが、これは前述したように、古典詩では「春秋」が時間の循環を表現しているのと同じである。

### 三 古典詩詞に見られる「春花秋月」

本節では、唐代および宋代以降に詠われた「春花秋月」の例と、この語に込められた思いについて考察していく。古典詩詞に「春花秋月」が初めて現れるのは、例①晩唐の魚玄機の「題隱霧亭」(二七)においてである。まず、この詩を見てみる。

①唐・魚玄機「題隱霧亭」隱霧亭に題す(二七)  
春花秋月入詩篇 春花 秋月 詩篇に入り

例⑮と同じく、「春風」と「秋月」を対として用いた例は、例⑰にも見える。岑參の句は「秋月春風」を「相ひ待たず」というように、「人を待たずいつも流れていく」時の象徴として用いていると考えられる。初唐の張説の「蜀道後期」(全八九)の「秋風不相待、先至洛陽城。」(秋風相ひ待たず、先に 洛陽城に至る。)には、すでに「秋風」が時の流れを表す語として用いられており、岑參の句はその用法を継いだと考えられる。

さらに中唐の白居易には、次のような例が見える。

⑳中唐・白居易「過元家履信宅」(全四五〇)

前庭後院傷心事 前庭後院 傷心の事

唯是春風秋月知 唯だ是れ 春風秋月の知るのみ

㉑中唐・白居易「送滕庶子致仕歸蔡州」(全四六一)

春風秋月攜歌酒 春風秋月 歌酒を攜へ

八十年來翫物華 八十年來 物華を翫ぶ

例⑳の「元家の履信の宅に過る」という詩は岡村繁によれば、「元稹の死後、その長女の履信里の旧宅を訪い、寂寥の状を叙した詩」である。「前庭裏庭の寂しげな景色を見て、たくさんの悲しいことを思い出した。この気持ちは春の風と秋の月しか知らない。」という慨嘆で、春の風や秋の月は不変でも、同じ場所に住んでいる人、この世のことは変わってしまうという意味である。

例㉑に詠われた「歌を聴いて酒を飲み、春の花や秋の月を見て、八十年間、美しい景色をもてあそんできた。」

白日清宵是散仙 白日 清宵 是れ散仙

空捲珠簾不曾下 空しく珠簾を捲いて 曾て下さず

長移一榻對山眠 長に一榻を移して 山に對して眠る

詩題に関して、代表的な魚玄機研究者の辛島驍は、「隱霧亭は鄂州(今武昌)で山居していたころ、住居を『隱霧亭』とみづから名づけていたものである。」と述べている。

「隱霧」という詩は、本来霧に隠れる意味である。『列女傳』卷二「賢明傳・陶答子妻」には、「妾聞南山有玄豹、霧雨七日而不下食者、何也。欲以澤其毛而成文章也。故藏而遠害。」(わたくしの聞きますところでは、南山に玄豹がおりまして、霧が七日降りますと「じつと霧に打たれていて」ものを食らおうともいたしません。何故でございましょう。それはその毛を潤して、文様を美しくするためでございませう。ですから身を隠して害を遠ざけるのでございませう。とあり、後に「隱霧」「隱豹」の語は隠遁して出世する時を待つことを指すようになった。

㉒中唐・錢起「歸義寺題震上人壁」(全二二六)

堯皇未登極 堯皇 未だ極に登らず

此地曾隱霧 此地 曾て霧に隠る

例㉒は、「隱霧」の故事を用い、堯が帝になる前に、ここで雌伏してチャンスを待ったことを表現している。魚玄機は女道士になった後、世間を遠ざける生活を送っていた。そのため、「題隱霧亭」と名付けたこの詩は、魚玄機が女

道士になった後に書かれたものである可能性もあると思われる。

この詩の起句と承句は、「春の花も、秋の月も、すべてを詩に詠み込んで、明るい昼間も、清らかな夜も、(私はのんびりして楽しんでいて) 散仙<sup>⑫</sup>のようである。」という、美しい景色とのんびりした生活を描く。それに続いて、転句と結句は「珠簾をあげたままにして、一つのこしかけを(その珠簾の下に)運んで、いつも山に対して眠る。」という日常生活を詠っている。

『名媛詩歸』<sup>⑬</sup>が、「景事皆寫得有雅致。」(景色と事物がすべて風流の趣のあるように書かれている。)と評しているように、素晴らしい景色を楽しむこと、および詩篇を作ることが「春花秋月」の語を用いて詠われている。この詩について、辛島氏は、「悠々とうちくつろいだ心をつたっている。」と述べている。柯氏らは、「春花秋月、喻美好的时光。此处也指她的好心情。白日清宵、谓日日夜夜。概括地说、这两句写她的女冠生活、过得快乐似神仙。」<sup>⑭</sup>(引用者訳・春の花、秋の月は、美しい時間を喻える。それは彼女の快適な心情でもある。白日清宵は、毎日毎晩ということである。要約すれば、この二句は彼女の女冠生活を神仙のように楽しく過ごしていることを描いている。)と解釈している。

すなわち、「春花 秋月 詩篇に入り、白日 清宵 是れ散仙。」において、花と月は美しい自然の景物の象徴として用いられ、同時に詩人自身の悠々とした生活を表現し

た詩語であると言えよう。

すでに用いられていた「春風秋月」と比べると、「春花秋月」はより印象的な詩語といえるだろう。例えば、「春花」も「秋月」も観賞の対象として用いられる点、生命力が感じられる春の花と故郷を懐かしく思う気持ちを引き出す月が対比される点、赤い花と白い月という色彩の対比が明確である点などが、その特色である。これらは魚玄機が詩語を選択する上で工夫した点と考えてよい。

このように、魚玄機は、より色彩の対比が強くて美しい「春花秋月」という四字の詩語を用いた最初の詩人というだけではない。「春花秋月」という生活の中の美しい景色や時間を表現することに加えて、「春花秋月」が詩人の作詩意欲を呼び起こし、詩の題材になるということを述べており、作詩と「春花秋月」とを関連づけた点に新しさがあるといえるだろう。

⑫ ⑬ 南唐・李煜「虞美人」<sup>⑮</sup>(全八八九)

魚玄機の後、南唐の李煜の詞にも、「春花秋月」の語を用いた名句がある。この詞を挙げておく。

春花秋月何時了 春の花 秋の月 何時か了まる  
往事知多少 往事 知んぬ少ぞ  
小樓昨夜又東風 小樓に昨夜又たも東風  
故國不堪回首 故國は回首するに堪えず  
月明中 月明の中

しかし宋代になると、詩詞に登場する「春花秋月」が増えてくる。この節ではこれらの例を検討し、唐代の例との関係を明らかにしていきたい。中国古典詩のデータベースである「搜韻」<sup>⑯</sup>を使って検索し、該当する具体例を見つけてそれぞれ出典を確認した上で集計し、次のような表を作成した。表のように、検索した範囲では、古典詩詞には「春花秋月」・「秋月春花」の用例は二七八例みられる。

表 古典詩詞に見られる「春花秋月」の数

年代	唐	宋	元	明	清
詩数	2	42	45	88	101

李煜の詞の冒頭部分では「春の花は毎年咲き、秋の月は毎年夜空に輝いているが、巡り来る季節はいつ終わるのだろうか。過去の歲月の中で、数限りない思い出がある。」と述べている。「問君」以下で、「心の中の愁えがどれだけあるかと聞くと、多分東に流れる長江に満ち溢れる春水のように、果てがないだろう。」と詠じている。自然の景物は毎年そのままであるが、人生はいつも変わっていく、という嘆きが、「春花秋月」の語を用いて詠われている。

このように、「春花秋月」という詩語の使用において、魚玄機と李煜の共通点は、美しいもの及び美しい時の象徴であることがわかる。異なるのは、魚玄機がそれを作詩と結びつけているのに対し、李煜は「春花秋月」が流れる時間の中で循環し、毎年その美しさを披露していくことに重きを置いている点であろう。

(3) 宋代以降

前の二節では、魚玄機と李煜の例をあげたが、宋代までの詩詞にはこの二つの例しか見られないようである。

⑭ 宋・呂南公「夢寐」『灌園集』(卷五)

春花秋月各無味 春花秋月 各味無し

⑮ 宋・釋道潜「送處度赴試」『參寥子詩集』

晚鼓曉鐘俱斷腸 晚鼓曉鐘 俱腸を断つ

肯與齊梁作後塵 肯て 齊梁と 後塵を作さんや

秋月春花恣嘲弄 秋月春花 嘲弄を恣にす

⑯ 宋・呂渭老「好事近」『聖求詞』

尊酒幾番相對 尊酒 幾番か 相ひ對して

例②では、「春花秋月 各味無し」と言っているが、本当に面白くないのではなく、この詩は詩人が夢の中で昔の場所に戻るが、詩人の心境が変わってしまっていることを詠じている。淋しい気持ちの下で見ると、過去と同じ美しい景色も味がないと感じるのである。例⑤における「嘲弄ーからかう」というのは、むしろ楽しむという意味で、「春花秋月」のような美しい自然の中で気ままに遊ぶことをいう。例⑥は、「春花秋月」、つまり目の前の景色や今の素敵な出会いの時間を楽しむことという。

例④例⑤例⑥などのように、自然の景物・素晴らしい時間の象徴として用いられるのが、基本であるが、全二七八例の約六割余りを占めるのがこのような自然の景物・素晴らしい時間の象徴だけとして詠われた「春花秋月」であり、これは明清まで引き続き用いられている。

②⑦明・唐寅「花月吟效連珠體十一首」其十一（『六如居士全集』）

春花秋月兩相宜 春花秋月 兩ながら相ひしく  
月競光華花競姿 月は光華を競ひ 花は姿を競ふ

②⑧清・弘曆「董邦達山水小幀」其十（『御製詩集』卷八）  
只有江濤千古在 只だ 江濤の千古在る有り  
春花秋月自東流 春花秋月 自ら東に流る

以上の例②⑦例⑧からわかるように、明清に至るまで、「春花秋月」は依然として生活の中の美しいものの象徴として詩の中に登場しており、前述した魚玄機の詩の表

月」には、詩を作る意欲に対しての「春花秋月」の重要性が詩人の視点から語られている。例⑩楊萬里の詩も、「春花秋月 千首の詩」と、「春花秋月」と詩を結びつけている。

⑩宋・虞儔「聞爆竹」（『尊白堂集』卷四）

慣憑詩酒弄光陰 詩酒に憑つて光陰を弄ぶに慣れ

秋月春花伴醉吟 秋月春花 醉吟に伴ふ

⑩宋末元初・尹廷高「哭緑坡二首」其一（『玉井樵唱』卷中）

秋月春花吟不盡 秋月春花 吟ずるも盡さず

汀蘭岸芷死猶香 汀蘭岸芷 死して猶ほる

⑩元末明初・李穡「謝李開城携酒見訪」（『牧隱詩藁』卷之十六）

春花秋月嘯詠裏 春花秋月 嘯詠の裏

雷霆雨露經論中 雷霆雨露 經論の中

例⑩は「醉吟に伴ふ」、例⑩は「吟ずるも盡さず」、例⑩は「嘯詠の裏」と詠っている。すなわち、これらの例は、「秋月春花」「春花秋月」と作詩との関係をはっきりと示しているといえよう。

つまり、これらの例の中の「春花秋月」は、すべて魚玄機の詩と同じように、詩を作るという行為と結びついていて、美しい自然の景物や美しい時間は、詩人の詩を作る意欲を引き起こすものとして用いられている。

一方、李煜の「春花秋月」を詠った詞は、広く知られるものであることから、不変なものの意味が、宋代以降

現を受け継いでいると言えるだろう。

一方、これらの用例は、前述した魚玄機の例のように、作詩と関連させるものや、また李煜の例のように、不変なもの象徴として用いられた例とは言いえないものである。そして、全二七八例の約一割弱を占めるのが、魚玄機の詩に詠われた「春花秋月」と同じく、作詩という行為と一緒に用いられた例である。残りの約三割弱は李煜の詞に詠われた「春花秋月」と同じく不変なもの象徴として用いられた例である。ではまず、魚玄機と同じ方向で用いられた「春花秋月」の例からみていく。

⑨宋・趙鼎臣「蔡興兵曹謝曾秀才見和梅花詩復此韻爲謝」（『竹隱畸士集』卷三）

詩如病疥歇復發 詩は病疥の如く 歇んで復た發す

⑩宋・楊萬里「和王司法雨中惠詩二首」其一（『誠齋集』卷十一）

最忌春花與秋月 最も春花と秋月とを忌む

春花秋月千首詩 春花秋月 千首の詩  
一字不曾堪療饑 一字 曾てを療すに堪えず

例⑨は、蘇軾や王安石などと唱和したことのある宋代の趙鼎臣の詩句である。これは、魚玄機以降「春花」「秋月」と作詩の関係が詠われる詩の用例として最も早い時期の作品と考えられる。

趙鼎臣の詩は、「詩心は病気のように治つたり再発したりする。春花や秋月のような美しいものを見てはいけない（詩を書きたくなるからである）」と詠う。この「春花秋

も詠い継がれていく。次に、その用例を見てみよう。

④宋・蔡伸「念奴嬌」其四（『御選歷代詩餘』卷六十七）

逸氣凌雲 逸氣 雲を凌ぎて

佳麗地 佳麗の地

獨占春花秋月 春花秋月を獨占す

例④は、「当時は気性が豪放で、常に美しい景色を訪ね、春花秋月を独り占めた。」と輝かしい少年時代が過ぎ去ったことを嘆いたものである。「春花秋月」は素晴らしい昔を象徴する語として用いられている。不変である毎年の「春花秋月」と、変わっていく自分の人生とが対比されている。

⑤金末元初・尹志平「無俗念」（『葆光集』）

冬寒夏暑 冬寒夏暑

共春花秋月 春花秋月を共にし

年年無別 年年 別無し

例⑤の詞の中でも、「春花秋月」は永遠に美しい事物の代表で、毎年まったく変化していないという。詞人が本当に言いたいのは「それでは変化するのは何か。年をとって変わっていくのは私たち自身である。」ということだろう。これらの例では、「春花秋月」は素晴らしい昔の象徴として用いられている以外に、李煜の句と同じく、不変なものとしても見られる。

この節ではここまで、古典詩詞に現れる「春花秋月」と、それらの関係をとりあげてきた。前節の議論からもわかるように、美しい時を指す「春花秋月」の意味には、

詩歌において詠われる対象となるものと、不変な美しいものとの二種類があると言えるだろう。

(4) 近現代辞書に載せられる「春花秋月」

現代中国語でも「春花秋月」は熟語として広く使われている。そこで本節では、比較的権威のある現代漢語辞典の「春花秋月」の記載について検討してみる。

I 『漢語大詞典』第五卷、第六四二頁

i 春天的花。 秋天的月。 指春秋佳景或泛指美好的时光。

(春の花。 秋の月。 春秋の佳景あるいは広く美しい時を指す。)

・南唐 李煜「虞美人」詞…「春花秋月何時了？往事知多少！」

・『醒世恆言・勘皮鞞單證二郎神』…「若是氏兒前程遠大，將來嫁得一个良人，一似尊神模樣，偕老百年，也不辜負了春花秋月。」

(もし将来が明るくて、良人に嫁ぎ、(二郎) 尊神の(夫婦仲が良い) ように、百年添い遂げれば、春の花や秋の月にも背かない。)

ii 指岁序更迭。(歳序が変わること。)

(元本) 高明『琵琶記 牛牛小姐愁配』…「非干是你爹意堅，怕春花秋月，誤你芳年。」

(お父さんの意志が堅いのは関係なく、春花秋月(が毎年交替してゆき)、君の若い時代を損なうのを恐れているからだ。)

清 孫德祖『小螺盒病榻憶語』題詞・哭舍妹…「春

このような辞書から、現代に至って、「春花秋月」は

すでに成語になり、素晴らしい物事と時間の象徴として広く認められていることがわかる。また、『醒世恆言』における、良人と結婚して百年添い遂げること、「春花秋月」のような良い時を無にしないというのも、また「千家詩」に言う、「春花秋月」のような美しい景色を楽しみながら、四季を通じて詩の境地に浸っているというのも、魚玄機と李煜の詩詞における「春花秋月」のイメージとほぼ同様ではないかと思われる。

## おわりに

本稿では、古典詩詞における「春花秋月」という詩語の意味と表現方法を明らかにすることを意図して、この詩語を初めて用いた魚玄機の詩を中心に考察した。第一節と第二節の考察により、三つのことが明らかになった。

一つ目は、「春花」「秋月」という詩語は、魏晉南北朝時代にすでに現れているが、季節の詩語や自然景物そのものとして詠じられた場合が多く、当時から「春花」や「秋月」は、詩における自然の景物として重要なイメージを持つていたことである。

二つ目としては、古典詩には、「春花」と「秋風」「秋氣」、および「秋月」と「春草」「春風」などの語を組み合わせて用いた例が見えるが、唐代以前においては、「春花」と「秋月」は同じ詩に現れておらず、当然「春花秋月」の例

花秋月一年年，靜鎖紅閨鎖日閑。」(春花も秋月も、年々同じ様子をくりかえす、私は静かに閨閣に閉じこもつて、閑である。)

i の部分では李煜の名句が例として挙げられている。ii の意味は、「歳序さいじゆが変わること。」であり、「春花秋月」自身は変わらず、毎年美しい春の花と秋の月が交互に現れるうちに、歳序が変わっていくのである。「春花秋月」が不変なものであることは、本稿で検討したように、李煜「虞美人」の「春花秋月」にも見られるものである。

さらに、広く使われるオンライン辞書の「漢典」でも、『漢語大詞典』の一つ目と同じような解釈が載せられており、李煜の名句も例として挙げられている。

II 『漢典』<sup>15)</sup>

【解釋】 春天的花朵，秋天的月亮。泛指春秋美景。

【出处】 南唐・李煜《虞美人》词…「春花秋月何時了，往事知多少。」

【示例】 冬天去了，春天又回来了。吟诵这些诗句，春花秋月，一年四季都沉醉在诗的意境里。(于漪『我与「千家诗」』)

(冬が去って行き、春がまた戻ってきた。これらの詩句を吟じて、春の花と秋の月、一年中四季にわたって詩の世界の中に酔いしれている。)

【语法】 联合式；作主语；指春秋佳景。  
(複合語：主語扱い：春秋の佳景をいう。)

もないということである。三つ目は、例⑩南朝陳の陸瓊は「還臺樂」で、「春風秋月」を不変な物事の象徴として用いているが、例⑪盛唐の岑參は「梁園歌送河南王説判官」で、中唐の白居易の例⑫「過元家履信宅」と⑬「送滕庶子致仕歸婺州」で、時間の変遷や交替を詠うのに用いており、岑參の表現も、白居易の表現も、李煜の詞に見られる「春花秋月」の用法と類似していると考えられることである。

さらに、第三章(古典詩詞に見られる「春花秋月」)の部分の考察により、魚玄機は初めて「春花秋月」を一つの詩語として用いた詩人であるとわかった。そして、「春風秋月」と比べると、「春花秋月」は、より印象的な詩語であり、これは魚玄機が詩語を選択する上で工夫した点であると考えられる。

また、魚玄機の詩における「春花秋月」には、自然の景物である春の花と秋の月そのものという意味と、素晴らしい物事と時間を象徴することという意味が含まれている。この捉え方は、李煜が継承した後、「歲月交替」のような新しい意味も含むようになり、そのまま現代まで引き続いて用いられている。一方、魚玄機の「春花秋月入詩篇」は詩語としての「春花秋月」と作詩との関連性を詠っている。この用法が宋代以降の詩にも見られるということは、魚玄機の詩の影響の強さの現れであろう。

最後に、現代に至って、「春花秋月」はすでに成語となり、優れた物事と時間の象徴と認識されているが、今

回の考察によって、これは李煜だけでなく、魚玄機の詩における「春花秋月」のイメージとほぼ同様であることが明らかとなった。李煜の句のみによる影響ばかりではないと考えられよう。

本稿で取り上げたのは、魚玄機の独創的な詩的言語表現の「春花秋月」である。月と関わる魚玄機の詩の中には、「風月滿庭秋」（「秋怨」二二）のような短い句で自然の景物と感情を詠ったものがある。これらの洗練された句には、巧みな詩才と詩人としての独自性がうかがえる。これらについてはまた稿を改めて論じたい。

## 注

[1]本稿では、魚玄機の詩は南宋陳氏書棚本（中国国家図書館所蔵）『唐女郎魚玄機詩』をテキストとし、便宜上筆者がつけた五十首の通し番号を○に入れて記す。唐以前の詩は『先秦魏晉南北朝詩』（中華書局 一九八三）により、そのページ数を記し、唐詩は『全唐詩』により、巻数を記す。宋以降の詩は別集を参照し、巻数を記す。引用する詩には便宜上①～⑳の通し番号を付す。

[2]郭海文「唐代女性詩歌研究」（陝西師範大学 博士学位論文 二〇〇四）は、女性詩人の詩を時代別に分類し、晩唐の魚玄機の部分で、この詩に言及している。郭は「而后期、因为有了相对的心灵自由、行动自由、她去的地方显然增多、而且不只是抒发个人的儿女情长。如「題隱霧亭」（本稿と関係な

に關する覺え書」（『中國詩文論叢』卷一 一九八二）では、「中國の春秋に特に著しい時間的屬性は、一面では、韻文史における春と秋への詩的抒情を増幅させつつ、一面では、散文史における歴史書への執着を持續させてきたのだと言ってよい。」と述べている。

これらは、中国詩歌の歴史上、「春秋」はまず循環の時間意識と関わっており、さらに春秋の成長と衰退という季節の特徴と、また人の感情の表現と関わっていることを指摘する。

[5]本稿であげた白居易詩の訓読及び現代日本語訳は、岡村繁著『白氏文集』（『新釈漢文大系』 明治書院）を参考にした。例⑨は『白氏文集』二下（二〇〇七）による。後述する例⑳例㉑に関わる解釈も、岡村氏の訳注『白氏文集』十（二〇一四）を参考にした。

[6]本稿であげた陶淵明の詩の訓読と現代日本語訳は、釜谷武志著『陶淵明』（『新釈漢文大系 詩人編』一 明治書院 二〇一一）を参考にした。

[7]青袍の語には、主に①青い色の上衣、②官吏の服装、③学生（の服装）、④身分の低い者の着る服、という四つの意味がある。例⑯の句は魏晉・無名氏の「古詩」に見られる「青袍似春草」（青袍 春草に似る）という一句を用いたものである。また、『詩経』「秦風」の「無衣」に「豈日無衣、與子同袍」（豈に衣無しと曰はんや 子と袍を同じうせん）と見える。「同袍」という語は、戦友・兄弟・友人のような感情を指している。そのため、例⑯の青袍は友人の情を象徴

い詩の用例は引用者が省略した。）这些诗才是鱼玄机的厚重处、才是她的价值所在」（後期において、相対的な心の自由と、行動の自由を得たことにより、彼女の行った場所ではなくかに増え、その上個人的な恋愛感情を叙情するだけではなくなった。たとえば、「題隱霧亭」（引用者略）これらの詩こそが魚玄機の需要なところであり、彼女の価値のありかなのである。）と述べている。しかし、この詩についてはそれ以上の言及はない。

[3]詠物詩の面から、張玲「唐亭的文化透视——以唐代詩文为重点的考察」（西北大学 修士學位論文 二〇〇九）で、この詩を亭類の詠物詩に分類し、「亭中卧榻而眠令人羨慕」（亭中の寝台に横たわって寝ているのはうらやましい限りである。）と述べるに過ぎない。

[4]松浦友久『中国詩歌原論』（大修館書店 一九八六）「詩と時間」の一節では、中国古典詩の時間意識について以下のように述べている。

「逝者如斯夫不舍昼夜——逝く者は斯くの如きか、昼夜を舍かず」（『論語』子罕）、『黄鶴一去不復返』黄鶴ひとたび去ってまた返らず』（崔顥『黃鶴樓』『全唐詩』卷一三〇）といった表現が愛唱されてやまないように、中国の時間意識は、循環的であるよりは著しく経過的である。このばあい大事な点は、一見、循環的に見えるはずの四季の時間も、人事と対比することによって、人間にとつての経過性・一回性が明白に自覚されることである。」

また、「中國古典詩における春秋と夏冬」詩歌の時間意識

していると考えられる。

[8]辛島曉著『魚玄機・薛濤』（『漢詩大系』一五 集英社 一九六四）による。

[9]現代日本語訳は中島みどり訳注『列女伝』一（平凡社 二〇〇一）による。

[10]散仙には、主に「道」職を授けられていない仙人。」と「官職をまだ得ず、気ままにふるまえる文人。」という二つの意味がある。魚玄機は女道士であるから、例①の「散仙」は一番目の解釈であるべきで、しかも主に生活が悠然としていて快適な状態を強調している。

[11]『名媛詩歸』は明末竟陵派の詩人鍾惺が編んだ歴代女性詩歌作品の総集編である。太古の神話の人物である皇娥嫫祖の「清歌」から明代の王微の「留別林天素」まで、約三五〇人の女性詩人、一六〇〇首の作品が収録されている。

[12]呉柯、呉維傑補注『李冶・薛濤・魚玄機詩集』（中国書店 二〇一七）による。

[13]本稿であげた李煜の詞の訓読は、村上哲見注『中国詩人選集』16『李煜』（岩波書店 一九五九）により、仮名遣いも新仮名遣いとした。以下の現代日本語訳も本書を参考にした。

[14]搜韻：<https://sou-yun.cn/?lang=tc>（参照2023.2.14）

[15]『漢典』：<https://www.zdic.net>（参照2023.2.20）

【主要参考文献】（本文と注であげたものは省略する。）

陳文華校注『唐女詩人集三種』（上海古籍出版社 一九八四）



彭志憲・張燚著『魚玄機詩編年詁注』（新疆大學出版社 一九九

四）

下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩詁注』（講談社 二〇一六）